

人を見る、耳を傾ける

薬学研究科委員長

とみまさとし
登美斉俊君



教授室のドアをノックすると、中から笑い声が聞こえた。呼ばれて入ると、学生がびっくりしたようにこちらを見つめる。登美斉俊君は学生三人に囲まれて、何やら熱心に議論していたようだ。私が「あ、すみません。また出直しますね」と去ろうとすると、「いや、ちょうど終わりがけなので、聞いてください」と、まったく邪魔された様子もない。登美君は、学生を促すように目を細めながら耳を傾けていた。

二〇〇九年に慶應義塾大学薬学部薬剤学講座に入職して以来、登美君は薬剤がその効果を発揮する標的器官に届く機能を担うたんばく質の制御——簡単に言えば「薬がちゃんと効くべき場所に届く仕組み」の研究で、めきめきと頭角を現した。四十歳で教授。私とは畑が違うが、同じ年に教授選を通過した、いわゆる「同期のサクラ」だ。

登美君は、最先端の薬学研究者という側面がありながら、一般の学生達との屈託のないやり取りは、学生に寄り添いながらも、長所を見定めつつ適確なアドバイスで導き育成する良き指導者としての、私の目に映っている。教務委員長としての対応を求められたとき、配慮の行き届いた返信メールに垣間見える、その絶妙なバランスからくる安定感は、学生

には頼れる兄貴的な存在と受け止められているようだ。大学院専攻長、および学部教育の要である教務委員長を数回にわたって歴任されてきたことは、その信頼の厚さを物語る。

医療・医薬産業を支える科学技術の進歩と医療の高度化はとどまることなく、薬剤師を取り巻く社会と医療環境は、大きく変化しつつある。さらに、少子高齢化や国境を越えて迫る危機に対応できるレジリエントな社会の構築に向け、薬学研究者には、その時々武器となる知識と技術を生み出す期待がより一層高まっている。その期待を反映する一昨年の薬学教育新モデル・コアカリキュラムの制定後、登美君は薬学部教育カリキュラムを再構築する責任者の大役を実直に果たされた。今後は、大学院生のさらなる基礎学力向上のみならず、医薬の世界をリードしうる優れた研究者を輩出し、成果を社会が享受するための仕組みづくりに向けて、登美君の稀有な目線合わせの能力がその本領を発揮することを心より期待している。

サクラは咲くには散ることを恐れず、散れども春は終わらず。

薬学部教授

うしろしはらひさし
漆原尚巳